

# 死者をおこす J.D.サリンジャー『キャッチャー・イン・ザ・ライ』におけるラザロのエピソードのパロディと死者の存在論

著者	井出 達郎
雑誌名	英語英文学研究所紀要
号	38
ページ	37-57
発行年	2013-03-15
URL	<a href="http://id.nii.ac.jp/1204/00024240/">http://id.nii.ac.jp/1204/00024240/</a>

## 死者をおこす

### ——J. D. サリンジャー『キャッチャー・イン・ザ・ライ』におけるラザロのエピソードのパロディと 死者の存在論

井 出 達 郎

#### はじめに

J. D. サリンジャーの『キャッチャー・イン・ザ・ライ』(1951年)には、主人公ホールデン・コールフィールドの一連の遍歴を通じて、「眠っている人間を起こす」というエピソードが、不自然なほど繰り返しあらわれる。寮で喧嘩騒ぎをしてルームメイトを起こす。真夜中に寮を出る際に大声を出してその階にいた全員が目覚めたと確信する。名前だけ知っていた女の子を電話で起こす。眠っていた娼婦を呼び出してもらう。こっそり帰った実家で妹のフィービーを起こす。前の学校でお世話になっていた先生を電話で起こす。このように繰り返される「眠っている人間を起こす」というエピソードは、ふつうこの作品についてよく言われるような、「孤独や怒りを抱えて街をさまよう少年」という本筋や、「子どもたちを捕まえるキャッチャーになりたい」という主題と、全く関係がないように見える。そのため、多くの読者からすれば、それは最初から目にとまらないか、たとえ目にとまったとしても、無意味なものとして片づけられてしまう。だ

が、多くの読者にとって無意味であることは、作品にとって無意味であることを意味しない。なぜなら、無意味に見えるものをあえて描いているということは、それが作品にとって、そうせざるをえないような必然性をもっていることを意味するからだ。そもそも小説というジャンルは、作品が独自なものであればあるほど、その独自性は、そうした無意味にも思える細部に宿ることが少なくない。そこには、単純な一般論や既存の枠組みに回収できないものが、しばしば作者本人にもわからないようなかたちで、にじみ出るようにして表出してくるからだ。それゆえ、この無意味に見えるエピソードへの疑問は、こう問われなければならない。『キャッチャー・イン・ザ・ライ』という作品が、不自然さを伴ってまで、このエピソードを繰り返し描かなければならなかった必然性は何か。

本稿では、この作品における「眠っている人間を起こす」というエピソードが、聖書の中のラザロのエピソード、すなわち、イエスが死んだはずのラザロを「起こす」というエピソードと共鳴しつつ、死者の存在論というべき問題を提示していることを示したい。いうまでもなく、イエスが死者を甦らせるのに対し、ホールデンの行為は、ただ生きている人間を起こすというだけであり、死者を「起こす」という行為ではまったくない。ホールデンの世界では、死者は死者のまま、あくまで不在であり続ける。その意味では、それは子どもじみたパロディでしかない。しかしホールデンは、その子どもじみたパロディの裏返しとして、イエスがラザロに行ったことに匹敵する行為を行い続ける。それは、彼にとってほかの誰よりも大切な死者、すなわち弟のアリーの存在を、読者に向けて常に想起させ続けることである。その行為は、日本語の「おこす」という言葉の多義性を用いて言えば、「ひっそりしていたものを目立つ状態にする」という意味で、死者を「興す」ことにほかならない。死者を実際に起こすことに失敗する

裏で、ホールデンは、アリーという死者を、「生存ではない存在形式において存在する者」(若松 50)として、存在させ続けるのである。死者を「起こす」ことの失敗を通じて死者の不在を印象づけつつ、逆にその不在の印象の強さから死者を「興す」ことへと読者を導くこと、ホールデンの子どもじみたラザロのエピソードのパロディは、そのようにして死者の存在を誘発するためにある。

### 1. 死者としての眠っている人間／眠っている人間としての死者

ラザロの話は聖書の中の一エピソードであるが、サリンジャーの作品と聖書とのつながりは、これまでの先行研究でも論じられている。2005年に発表された竹内康浩『ライ麦畑のミステリー』は、その中でも特に重要なものである。竹内は、ホールデンがフィービーのために買ったレコードを「落として」割ってしまうものの、フィービーがそのかけらを「とっておく」と申し出るというエピソードに注目し、前者の場面には“fall”という運動が、後者の場面には“save”という言葉が書き込まれていることを指摘しつつ、そこに“Fall”と“Salvation”の問題、すなわち聖書の「墮落」と「救済」の主題が込められていることを読み取っていく。本稿は、作品と聖書とのつながりを読み取る点でこうした先行研究を引き継ぎつつ、そこに、ラザロのエピソードとのつながりという新たな面を加えようとするものである<sup>1</sup>。

「眠っている人間を起こす」という何気ない行動の裏に、聖書という大

<sup>1</sup> 作品と聖書の他の結びつきを論じるものとして、たとえば John M. Howell の“Salinger in the Waste Land”は、ホールデンの自殺した友人の J.D. の名前が「イエス・キリスト (Jesus Christ)」のイニシャルになっていることを指摘している。

きな物語の要素が潜んでいることを端的に示しているのが、一連のエピソードの中で、ホールデンが名前しか知らなかったフォイス・キャヴェンディッシュという女性に電話をかける場面である。ホテルの一室にいたホールデンは、夏のパーティーであったプリンストン大学の学生にもらったというメモを取り出し、真夜中にもかかわらず電話をかける。キャヴェンディッシュは当然のように眠っており、何の面識もないホールデンに起こされたことに腹を立てる。一悶着あった後、少し落ち着きを取り戻したキャヴェンディッシュは、ホールデンにこう話しかける。「それにしても、こんなずれた時間に電話をかけてくるなんて。まったくもう（“This is certainly a peculiar time to call a person up, though. Jesus Christ.”）」(84)。この言葉には、聖書を喚起させるもの、そしてさらには、ラザロのエピソードを喚起させるものが、実にさりげなく含まれている。まず分かりやすいのは、最後の“Jesus Christ”という言葉である。文脈を考えれば、ここでの“Jesus Christ”は、驚きや狼狽を表す間投詞として使われているのは明らかである。だがその一方で、いうまでもなく、これは「イエス・キリスト」の名前そのものでもある。それゆえキャヴェンディッシュの言葉には、「ずれた時間に眠っている人間を起こすイエス・キリスト」に発せられたもの、というニュアンスが含まれることになる。

「ずれた時間に眠っている人間を起こすイエス・キリスト」というイメージは、一見すると、全くナンセンスで奇妙なものに思えるかもしれない。しかし実は、聖書の中のラザロのエピソードが描くものこそ、この「ずれた時間に眠っている人間を起こすイエス・キリスト」にはかならない。ヨハネによる福音書の第11章の1節から語られるこの話は、まず、ベタニア出身のマリアとマルタという姉妹が、兄弟のラザロが病氣であるとイエスに伝える場面から始まる。姉妹はイエスに助けを求める。ここで注目す

べきは、その訴えに対して、イエスがすぐに行動を起こさない点である。イエスはそのにお二日間滞在する。そして、二日経ってはじめて、ラザロを「起こす」ために出かける。「わたしの友ラザロが眠っている。しかし、わたしは彼を起こしに行く」(John 11.11)。イエスがラザロのもとを訪れたとき、ラザロは亡くなった後であり、死後からすでに四日経っていた。マリアもマルタも、もしイエスがその場にいてくれたら、ラザロは助かっていただろうにと嘆く。しかし、その四日の「ずれ」を全くもろともせず、イエスはラザロを「起こす」。「『ラザロ、出て来なさい』と(イエスは)大声で叫ばれた。すると、死んでいた人が、手と足を布で巻かれたまま出て来た」(John 11.43-44)。「起こしに行く」という言葉と四日間のずれという点において、この話に描かれているイエスの行為は、まさにキャヴェンディッシュの言葉に暗示されている、「ずれた時間に眠っている人間を起こす」というものになっている。

このようにして示される「眠っている人間を起こすホールデン」と「死者を生き返らせるイエス」との類似性は、サリンジャーの作品の中で、「眠っている人間」と「死者」とが重ねられていることによって、さらに強化されている。それはまず、ホールデンが通っていたペンシー校の寮の創設者であるオッセンバーガーをめぐる記述にほのめかされている。自身もペンシー校出身であるオッセンバーガーは、ペンシーを卒業後、葬儀屋の事業によって財をなす。そのオッセンバーガーの葬儀屋という仕事について、ホールデンは次のような想像をめぐらす。「やつはたぶん死んだ人間を袋なんかに入れて、川の中にでも放り投げるんだろう(“He probably just shoves them in a sack and dumps them into the river.”)」(22)。ここでホールデンは、死者が「袋(“sack”)」に入れられているというイメージを喚起させているが、この“sack”という言葉には、もともと名詞の「ベッド」、

あるいは動詞の「寝る」という意味が付随している。より重要なのは、実際に物語の中で、まさにそうした意味において、この言葉が繰り返し「眠っている人間」に対して使われていることである<sup>2</sup>。「とにかく周りには誰もいなかった。誰も彼もが寝ていたんだ(“Everybody was in the sack.”)」(69)。「うちへ帰りな、マック、いい子だから。帰って寝るんだ(“Go home and hit the sack”)」(198)。「部屋に入るとき、見ないでくれって彼女は言っているよ。まだ起きたばかりなんだ(“She just arouse from the sack”)」(237)。こうした例からは、眠っている人間もまた、死者と同じように“sack”に入っている人間として描かれていることが、それとなく印象づけられている。特に、死者を“sack”につめることで財をなしたオッセンバーガーが創設者であるペンシー校の寮には、その重なりを色濃く感じることができるだろう。ホールデンが寮で眠っている人間を起こすとき、「死者を起こす」というイメージが必然的に漂うことになる。

「眠っている人間を起こすホールデン」と「死者を生き返らせるイエス」との類似性は、さらに、「電話」というモチーフ、あるいは“call”という言葉をめぐつても示されている。ホールデンの眠っている人間を起こすという行為の多くは、キャヴェンディッシュや売春婦の女性を起こす場面、またアントリーニ先生を起こす場面にみられるように、電話をかけることによってなされている点が目につく。この電話をかけるという行為は、前述のキャヴェンディッシュの言葉の中にあるように、“call”という言葉で表されるものである。一方で、イエスの死者を起こすという行為は、墓に埋葬されているラザロに大声で呼びかけることによってなされる。ここで、

<sup>2</sup> 眠っている人間と死者が“sack”に入れられている点で似ていることについては、2012年度東北学院大学「演習Ⅰ・Ⅲ」における鈴木萌香の指摘によって気づかされた。

たとえば、新国際版聖書がこのイエスの呼びかけを“call”と表現している点を指摘し、そこに、この語がもともと含んでいる「神のお召し」や「天職」という宗教的な意味を読み込み、ホールデンとイエスに当てはめていく、という読み方も可能性としてはあるだろう<sup>3</sup>。だがより本質的に重要なのは、二人の行為がともに、「遠く離れた場所」へ呼びかけ、その離れた場所をつなぐものになっている、という点にこそある。ホールデンが行う電話として“call”は、自分がいる場所から物理的に離れている相手の場所へ向けられ、その物理的に離れている場所をつなぐ。そしてイエスの呼びかけとしての“call”は、生きている人間の世界から死者の世界へと向けられ、生の世界と死の世界という、同じように「離れている」場所をつなぐものになっている。注目すべきは、作中の電話のモチーフもまた、この後者の意味、すなわち、生の世界と死の世界をつなぐという行為に結びつけられていることである。それは、ホールデンが好きな作家を列挙しつつ、自分が好きな作家とは、作品を読み終わった後に電話をかけたくくなるような人間である、と説明する場面にあらわれている。ホールデンは、電話をかけてもいい気がする作家として、はじめにイサク・ディネセンという、この物語の舞台となっている1940年代後半に現存していた作家を挙げた後、リング・ラードナーもいいと付け加える。見過ごせないのは、その時点でリング・ラードナーは亡くなっており、ホールデン自身もその事実にあえて言及している点である。「それからリング・ラードナー。ただ、彼はもう死んじゃってるってD.B. から聞いたんだけどね」(25)。死者はも

<sup>3</sup> ただし、この作品が出版された1951年より前の英訳聖書である欽定訳聖書(1611年)、改訂訳聖書(1895年)、米国標準版聖書(1901年)では、イエスのラザロへの呼びかけは、すべて“he cried with a loud voice”となっており、“call”という言葉が使われている新国際版聖書が出版されたのは、1951年より大分経った後、1978年である。それゆえ、“call”という単語だけにこだわったこの読み方は、若干の限界があるようにも思われる。



う存在しないという感覚からすれば、死んでいる人間に電話をかけるという発想は、ナンセンス以外の何物でもないだろう。しかしホールデンは、その電話をかけたい作家のリストに、さらに、わざわざ当時現存していたサマセット・モームを除外した後で、ラードナーと同じくその時点で死者であったトマス・ハーディを付け加える。「僕はむしろ大好きなトマス・ハーディに電話をかけたいよ」(25)。ホールデンにとって電話とは、単に物理的に離れている場所をつなぐだけでなく、自分と死者をつなぐ回路にもなっているのである。この意味でホールデンの“call”は、イエスがラザロに向けて発した呼びかけと、そのまま重なることになる。ホールデンもイエスも、死者の世界という「離れた」場所に“call”する者としてある。

## 2. 死者の存在論

このように作品はホールデンとイエスとの類似性を提示する。だがその一方で、両者に決定的な違いがあるのもあきらかである。ホールデンが起こすのは、文字通りのただ眠っている人間である。一方、イエスの「起こす」という行為はあくまでも比喩であり、実際に行われるのは死者を生き返らせるという奇跡である。実現される結果だけをみれば、ホールデンの行っていることは、イエスの稚拙なパロディでしかない<sup>4</sup>。しかし、それは

<sup>4</sup> ホールデンの行為があくまでもパロディでしかないと、さりげなく示唆しているように思われる部分がある。ペンシー校の寮を真夜中に飛び出していく場面、大声を出してその階にいる全員が起きたと確信した直後、暗闇の中でホールデンは、ビーナッツの殻につまづいてしまう。その「暗闇でつまづく」という行動の全く逆のパターンを、ラザロのエピソードの中に見出すことができる。イエスがラザロのもとに向かおうとすると、周りの弟子は、ユダヤ人がイエスを石で殺すのではないかと心配する。それに対してイエスは、次のように言う。「昼間は十二時間あるではないか。昼のうちに歩けば、つまづくことはない。この世の光を見ているからだ。しかし、夜歩けば、つまづく」(John 11.9-10)。夜

ホールデンの行為が無意味であることを決して意味しない。ホールデンは、死者を「起こす」ことが不可能である世界、死者が不在であり続ける世界に生きていることを、そのパロディ的な行為の裏返しとして示し続ける。だが、逆説的なことに、その死者の不在を強く喚起させればさせるほど、その不在がはっきりと印象づけられることによって、その「いない」という「存在」が、現実には生きている人間の前にいやおうなく立ち現われてくることになる。それは、身体的に生き返らせるとは全く異なるかたちでの、不在のはずの死者を目立たせるという意味で、死者を「興す」ことにほかならない。ホールデンのパロディ的な行為は、生きている者が存在する在り方とは違うかたちで死者が存在しているという死者の存在論を、死者を興すことによって示すのである。

死者の存在論という問いは、実は、ラザロのエピソードの中にすでに含まれているものであると見てよい。ラザロの話の中にその問いを鋭く感じ取ったのは、デンマークの思想家セーレン・キェルケゴールである。キェルケゴールは、『死に至る病』（1849年）という、それ自体ラザロのエピソードの中の言葉を題名とした書の中で、「この病は死に至らず」というイエスの言葉を取り上げながら、ラザロが死んでしまっているにもかかわらず、「この病」はラザロを死に至らしめていないという、一見すると矛盾している状態に注目する。そして、もしイエスがラザロをいったん生き返らせたとしても、結局はまた死ぬという運命を逃れられないのであれば、この話に何の意味があるのか、と問いかける。キェルケゴールが示すのは、このラザロの話は、そのような身体的な生死の問題として読むべきではない、という決定的に重要なことである。キェルケゴールにとって、墓の中に埋

---

の暗闇でつまずくホールデンに対して、昼に歩くことでつまずかないイエスというこの正反対の一致は、両者の類似と差異をともに示している。

葬されていたラザロがイエスから与えられた生とは、イエスがラザロとともにいるということ、イエスが死者とともにいるということ、ただそのこと自体である。

よしラザロが死人の中から甦らしめられたとしても、結局はまた死ぬことによって終局を告げなければならなかったとしたら、それがラザロにとって何の役に立とう？ キリストが、彼を信じるすべての人にとって復活であり生命であるような方でなかったならば、それがラザロにとって何の役に立とう？ いな、ラザロが死人の中から甦らしめられたからして、そのためにひとがこの病は死に至らずといいうるのではなく、彼がそこにあるからして、その故にこの病は死に至らないのである。(16)

ここからキェルケゴールは、死さえも「死に至る病」ではない、というテーゼを導き出していく。それは、死とは存在の終わりを意味するのではない、と言っているのに等しい。ラザロのエピソードは、単なる身体的な生死の状態を超えて、そのような死後の存在についての問いへとつながっている。

死者とともにあることが死者を死に至らしめないこと、キェルケゴールが引き出したラザロのエピソードのこの含意は、ホールデンの死者に対するあり方にそのまま重なっている。イエスにとっての死者とはラザロであった。では、ホールデンにとってのそのような死者とは誰か。それは、弟のアリーである。作中の 1946 年 7 月 17 日に白血病で亡くなったというアリーは、ホールデンの一連の遍歴の中で、ところどころに断片的な回想というかたちで挿入され、直接的に語られる場面はそれほど多くない。そのために、特にこの作品をホールデン個人の悩みや憤りのみに焦点を当てる読み方では、アリーという存在は、文字通り「いない」ものとして扱われる傾向にある<sup>5</sup>。死者をいないものとして扱うこの態度は、作中のホール

<sup>5</sup> アリーの存在を見過ごしやすい批評の傾向を指摘しつつ、その死が作品にとって重要な意味を持っていること論じている研究としては、David Burrows の “Al-

デンの周りの人間も同じである。実家に戻ったホールデンが、妹のフィービーに退学したことを責められ、この世のすべてが気に入らないのはいか、好きなものをひとつでもあげることができるのか、と問いつめられる場面において、ホールデンは好きなものとしてアリーを挙げる。フィービーはすぐに、アリーは「死んでいる」と反論する。「アリーは死んでるの——いつもそう言ってたのお兄ちゃんでしょ！もし誰かが死んじゃったかなんかして、天国にいるんだとしたら、それは本当に——（“If somebody's dead and everything, and in *Heaven*, then it isn't really—”）」(222)。フィービーの言葉は途中で切れてしまうため、最後のセンテンスが実際に何を言おうとしたものなのかは分からない。ただ、この中途半端な“it isn't really”というセンテンスの断片は、それが中途半端であるゆえに、“is”がもつ自動詞の「存在する (exist)」という意味を喚起させながら、「それは現実には存在しない」というニュアンスを帯びてしまっている。直前のイタリック体で強調された“in *Heaven*”も、そのニュアンスを後押ししているだろう。だが、「現実には存在しない」というその言葉を断ち切るようにして、ホールデンはアリーの存在の確かさを主張し始める。「アリーが死んでるのは分かってるよ！ 分かってないとも思ったの？ だけど、それでもアリーを好きでいたっていいだろ？ 死んでるからって、その気持ちを止めることなんてできないんだよ、どうやっても。もしそれが生きてるんだか何だかの人間よりも千倍もいいやつだったら、なおさらなんだよ」(222-23)。フィービーにとってアリーはもういない存在でしかないのに対して、ホールデンにとっては生きている人間以上に自分の気持ちを向けられる存在としてある。ホールデンの言葉は、現実にいるという

---

lie and Phoebe: Death and Love in J.D. Salinger's "The Catcher in the Rye" や、Martha Topper の “In Memoriam: Allie Caulfield in *The Catcher in the Rye*” がある。

のとは別のかたちにおいて、アリーが今も「いる」ことを示している。

ホールデンがアリーという死者のそばにしようとしていることを分かりやすく描き出しているのが、ホールデンの回想の中で語られる、アリーの墓参りの場面である。アリーの墓を親戚と一緒に訪れたホールデンは、突然の雨に見舞われる。周りの訪問者は一様に車へと走って帰っていく。ホールデンはそれが我慢できない。「墓参りに来てたやつら全員が馬鹿みたい」に車に走り始めた。それを見てたらおかしくなりそうだったよ。来てたやつらはみんな車の中に入ってラジオでもつけて夕食でも食べるにいいところへ行けるだろうよ。でもアリーだけはそうじゃないんだ」(202)。死者のもとを簡単に離れてしまう人々とは違って、ホールデンはアリーという死者を置いてどこかに行くことができない。キェルケゴールがラザロの話にみたイエスの姿と同じように、ホールデンは死者のそばにあり続けようとする。

いうまでもなく、死者のそばにいるという状態は、ただ墓のそばにいるという、物理的な近さの問題ではまったくない。不在であるアリーを「いない」ものとして扱わないこと、その不在にもかかわらず喚起させ続けることこそが、死者のそばにいること、死者の存在を興すことである。ホールデンが死者を興すやり方、それは、アリーへの「変身」願望とでもいべき特異なかたちでなされている。ホールデンのアリーへの変身願望については、前出の竹内の研究がすでに詳細に論じている。竹内は、アリーの「赤毛」、「左利き」、「ミットを残して死んでいく」という特徴を抜き出しつつ、ホールデンがそれらすべてをひそかに模倣していることを明らかにしていく。ホールデンは、お気に入りだという赤い帽子をいつもかぶり、アリーの死んだ日の夜に自分の右手を使用不可能になるほど傷つけ（それは必然的に左手しか使えなくなることを意味する）、帽子のひさしを野球

のキャッチャーのように後ろ向きにするのを好み、最終的には、ライ麦畑の「キャッチャー」になりたいと言い放つ。それぞれの振る舞いは、あたかもアリーそのものに変身したいかのように、その特徴をそのままなぞっている。竹内が明らかにしているこのアリーへの変身願望は、いいかえれば、アリーという不在の存在と常にとともにいることにほかならない。さりげなく、しかし確実に潜ませているホールデンの変身願望に気づく読者は、いま生きているホールデンの姿の中に、いやおうなく不在のアリーの姿を透かし見ることになる。「起こす」ことのできない死者という存在を、ホールデンはそうしたやり方で「興す」のである。

ホールデンの死者に対する態度に対して、それは単に死者の物理的あるいは身体的な遺物にこだわっているだけで、魂や精神はやはり不在のままではかない、という批判は十分に可能だろう。むしろ、ホールデン自身が、そうした考え方に与しているといってもよい<sup>6</sup>。前出の墓参りの場面において、ホールデンは次のように述べる。「墓の中にあるのはアリーの身体かなんかで、魂は天国かどっかにいるってことは、自分にも分かっているんだ」(202)。この無力感は、聖書の中のイエスとは違い、決して死者を起こすことができないという無力さそのものであるだろう。だが、ホールデンはすぐに、「それでも」という留保をつける。「それでも、自分は我慢できないんだ」(202)。うまく言葉で説明できていないこの留保は、決定的に重要である。なぜなら、たとえ魂や精神が不在だとしても、それでも死者のそばにいたいと願うこと、ホールデンがそうした引き裂かれた状態にいればいるほど、逆説的なことに、死者の不在の強度がそれだけ大きくなることによって、かえって死者の存在はより強く喚起されることになるか

<sup>6</sup> 死における身体と精神の区別をめぐる以下の議論は、2012年度東北学院大学「演習Ⅰ・Ⅲ」における只野洋平の指摘から着想を得て、発展させたものである。

らだ。死者論についての作品を書き続けている若松英輔の次の言葉は、死者の存在をめぐるそうした逆説を鮮烈に伝えている。「死者が接近するとき、私たちの魂は悲しみにふるえる。悲しみは、死者が訪れる合図である。それは悲哀の経験だが、私たちに寄り添う死者の实在を知る、慰めの経験でもある」（若松8）。悲しみという死者の不在を感じる経験とは、実は、死者の实在を感じるという慰めの経験なのである、と若松は述べている。それは、悲しみが大きければ大きいほど、それだけ死者の实在の確かさもより強くなっていく、という痛切な逆説を意味する。この逆説は、ホールデンの死者を興す行為にそのまま重なる。ホールデンがアリーの魂の不在を感じつつ、それでも死者のそばに寄り添おうとする行為は、感じられる不在が大きければ大きいほど、それだけ死者の实在は強く伝わってくることになるのである。

魂の不在を知りながら物質的なものや身体的なものにもこだわるという逆説的な性格は、ホールデンのミイラに対する偏愛にもみることができる。ペンシー校に在籍していた時のホールデンは、歴史のテストの自由選択の記述として、エジプト人のミイラについて書く。

さまざまな理由から今日の私たちにとってエジプト人はとても興味深い。近代科学は、エジプト人が死者の顔を何世紀も腐らせないように布で包んだときに使った秘密の材料が何だったのか、今なお究明したいと思っているだろう。この興味深い謎は、二十世紀の近代科学にとって、挑戦すべき謎であり続けている（16）。

歴史を担当していたスペンサー先生が怒りだすように、この適当な答えは、一見すると、死者が残す身体的なものに固執するエジプト人の習慣を、馬鹿にしているようにしか思えない。あたかもアリーの物理的な特徴にこだわる自分自身の姿に反するかのように、そうした習慣の無意味さを示して

いるように感じられてしまう。この印象は、アリーの墓参りでホールデンの言葉に照らし合わせてみれば、まったく正しい。墓の中にあるのは身体だけで、魂はどこか他の場所にあると言うホールデンは、物理的な遺物をとっておくことの無意味さを頭では分かっている。だからこそ、その最たる象徴ともいべきミイラについて語るための言葉を持たない。しかし、物語の終盤、そうした頭での理解を裏切るようなエピソードが現われる。偶然子どもたちを博物館のミイラの展示場へ案内することになったホールデンは、先の適当な答えをそのまま子どもたちに語って聞かせる。そして、展示場の気味悪さから逃げてしまった子どもたちを尻目に、ひとりその場に残り、「とてもいい感じで、平和だ」という感覚を覚える。なぜそう感じるのかを言語化できないのはここでも同じである。しかし、言葉では説明できなくとも確かに感じるその感覚は、ミイラについて語る言葉を持たない一方で、それでもなお、ミイラに惹かれているという実情を示しているだろう。そのギャップの中にこそ、ホールデンが興す死者の存在の強度がある。

### 3. 不在の死者に支えられる生者の存在

死者の存在論に関わる点において、サリンジャーの作品はラザロのエピソードと共鳴する。しかし、この点において、前者には後者にない特異な要素が含まれている。それは、生者であるホールデンの存在が、死者であるアリーの存在を喚起させるためにあるだけでなく、むしろ、その死者によって支えられている、という事態が描かれていることである。ラザロのエピソードにおいては、あくまでもキリストがまず確固たる存在としてあり、ラザロは一方的に救済されるだけである。それに対してホールデンは、



自身の存在の不確かさに襲われ、それをアリーによって救済される、という経験をする。興すというかたちでイエスのパロディを演じていたホールデンは、そればかりでなく、死者によって支えられる生者の存在となることによって、ラザロのエピソードには描かれていない死者の存在論を示していく。

死者によって存在の不安を救われるホールデンの姿は、物語の後半、フィス・アベニューを歩き続けているときに、ふと自分が今にも消えてしまうのではないかという気持ちに襲われる場面に描かれる。

そのとき突然、何か不気味なことが起こり始めた。ワンブロックの終わりに来て、縁石から車道へと歩み出すたびに、自分は道の反対側へは決して辿り着けないんじゃないかっていう気持ちになってしまったんだ。僕は思った。ただ自分は下へ、下へ、下へと落ちていき、誰からも見えなくなってしまうんじゃないかって。(256)

このホールデンの感情について、柴田元幸は、「存在論的不安」(柴田164)という言葉当てはめ、その生々しさを評価している。一見すると誇張にも感じられるその言葉は、存在そのものが消えてしまうのではないかというホールデンの思いの強さを適切に捉えているだろう。だがこの場面より重要なのは、そのようなホールデン個人の存在論的不安だけでは決していない。何よりも見落としてはならないのは、その存在論的不安が、アリーという死者によって、ただちにやわらげられている点である。

それから僕は違うことを始めた。ワンブロックの端に行くたびに、弟のアリーと話しているんだって信じることにしたんだ。僕は彼に言う。「アリー、僕を消さないでくれ。アリー、僕を消さないでくれ。お願いだよ、アリー」。そうして、消えずに道の反対側に行くことができたときに、僕は彼にありがとうと言った。(256-57)

ここに描かれているのは、不在の死者が生者の存在を支えるというあり方である。ホールデンとアリーの関係からは、こうした死者によって支えられる生者の存在が立ち現われてくるのである。

この場面について、多くの読者がホールデン個人の不安のみに目がいくのはもっともなことだといえる。不安をやわらげているのがアリーであるのが明白である一方で、アリー自身の声はどこにも描かれていないからだ。表面上、すべてはホールデンの独白だけであり、呼びかけられているアリーは沈黙したままである。だが、もしここでアリーの声が直接に描かれてしまうのであれば、それはアリーの不在という存在のあり方そのものを否定することに等しい。仮にアリーの直接の声によってホールデンが救われるのであれば、それはあくまでも、存在している者と存在している者との関係になってしまう。アリーは沈黙したまま、それにもかかわらずホールデンが救われることによって、はじめて死者が生者を救うという構図が浮き彫りになってくる。ホールデンは、アリーのそのような「生存ではない存在形式」にどこまでも寄り添い続け、それを生存という存在形式の語法で語ろうとはしない。そうすることで、不在というかたちで存在する死者に、その不在というかたちのままで、自らの存在を救われる。ある意味でそれは、ラザロを生き返らせたイエスとは異なり、死者に対して絶対的に無力であるホールデンだからこそ起こりうる事態だろう。ホールデンを救うのは、死者に対して無力な者が聞く、死者の沈黙なのである。

アリーという死者がホールデンの存在を支えていることは、そもそもこの作品の存在自体が、実はアリーの死によって支えられているという、隠された大きな事実にもあらわれている。作品の題名になっている「ライ麦畑のキャッチャー」というイメージは、ロバート・バーンズの詩の一節“*If a body meet a body coming through the rye*”をめぐって、ホールデンが

“meet”を“catch”として誤って覚えていたことから生み出されたものである。

「If a body catch a body」だと思っていたよ」と僕は言った。「とにかく、僕はいつも思い浮かべているんだ、ライ麦畑かどこかで小さな子どもたちが何かゲームをしているところを（I keep picturing all these little kids playing some game in this big field of rye and all）。何千人っていう子どもたち、他には誰もいない——大人たちは誰も、ってことね——ただし、僕だけはそこにいる。僕はすごい崖の縁に立っている。僕がしなくちゃいけないこと、それは、崖を乗り越えそうになっている子どもをみんなつかまえることなんだ」（224）

すでに多くの研究で指摘されているように、この箇所には、野球のイメージ、特に野球のキャッチャーのイメージが散りばめられている。“field”という語は「野球場」を連想させ、その“field”の縁という位置は、野球の守備体形における「キャッチャー」の位置そのものである。そして、そのイメージはすべて、アリーが残したミットに直接結びついている。だとすれば、そもそもホールデンが“meet”を“catch”として間違えて覚えたのは、「ライ麦畑」から“field”を連想し、そこにアリーのミットから来る「キャッチャー」のイメージを結びつけるという過程で生じたのではないかという推測、すなわち、アリーの存在がその根本にあるのではないかという推測は、それほど無理のあるものではないだろう。さらに、そのミットとは、アリーの形見としてその死後にホールデンの手に渡ったものであることを考えれば、「ライ麦畑のキャッチャー」というイメージには、あきらかにアリーの死が深く刻印されている。『キャッチャー・イン・ザ・ライ』という作品の存在、そしてそこに内包されるホールデンの存在は、何よりもこのアリーという不在の死者によって支えられているのである。

## おわりに

ホールデンもイエスとともに、生者の世界から死者の世界へ“call”する人間としてある。ただ、イエスの呼びかけが死者に現実の結果をもたらすのに対して、ホールデンの呼びかけは眠っている人間に向けられたパロディでしかなく、死者に対しては絶対的に無力である。しかし、死者に対して無力であるまさにそのことによって、死者の不在が生存とはちがうかたちで現われ、不在である存在がその不在という状態のままに目立ちはじめることになる。そして、そのような不在の死者によって、ホールデン自身の存在が救われる。ラザロのエピソードでは、ラザロを「起こす」イエスの行為は、ひとつの奇跡として描かれている。現実的な結果だけをみれば、ホールデンの「眠っている人間を起こす」というパロディ的な行為は、それに到底及ばない。だが、その無力さがひるがえって実現する死者を興すこと、そして、その興した死者からの沈黙の“call”によって救済されること、そこにもやはり、奇跡と呼ぶべきものが宿っているのは確かだと思われる。

## 引用文献

- Burrows, David J. "Allie and Phoebe: Death and Love in J.D. Salinger's 'The Catcher in the Rye.'" *Private Dealings: Modern American Writers in Search of Integrity*. Ed. David J. Burrows and Lewis M. Dabney. Rockville: New Perspectives, 1974. 106-14. Print.
- The Holy Bible: New International Version*. Grand Rapids: Zondervan, 1984. Print.
- Howell, John M. "Salinger in the Waste Land." 1966. *Critical Essays on Salinger's The Catcher in the Rye*. Ed. Joel Salzberg. Boston: Hall, 1990. 85-92. Print.
- Salinger, J.D. *The Catcher in the Rye*. Ed. Joel Salzberg. Boston: Little, Brown, 1951. Print.

死者をおこす—J.D.サリンジャー『キャッチャー・イン・ザ・ライ』におけるラザロのエピソードのパロディと死者の存在論

Topper, Martha. "In Memoriam: Allie Caulfield in *The Catcher in the Rye*." *Mosaic* 15.1 (1982): 129-40. Print.

『新共同訳聖書』日本聖書協会, 1987. Print.

柴田元幸『生半可版 英米小説演習』研究社, 1998 年. Print.

セーレン・キェルケゴール『死に至る病』1849 年, 斎藤信治訳, 岩波書店, 1939 年. Print.

竹内康浩『ライ麦畑のミステリー』せりか書房, 2005 年. Print.

若松英輔『魂にふれる——大震災と、生きている死者』トランスビュー, 2012 年. Print.

Calling the Dead Up :  
The Parody of the Biblical Episode of Lazarus and  
the Ontology of the Dead in J.D. Salinger's  
*The Catcher in the Rye*

Tatsuro Ide

Abstract

In J.D. Salinger's *The Catcher in the Rye*, Holden Caulfield repeatedly calls sleepers up in peculiar times. This paper aims to explain why the Salinger's story shows such a strong preoccupation with this pattern by suggesting its close resemblance of the biblical episode of Lazarus in the Gospel of John, in which Jesus Christ "calls" up the dead four days after his death. It is certain that, while what Christ actually does is to restore the dead to life, Holden only cries in a loud voice or makes a phone call to actual sleepers, not the dead. In this sense, Holden's act is just a childish parody of Christ's miraculous act. This resemblance, however, has a significant meaning to the story because the biblical episode demonstrates a characteristic condition that the dead is still alive, which strongly resonates with Holden's attitude toward his dead bother Allie. Overlapping the teenage boy and the biblical figure in the small action, the Salinger's story reveals a unique ontology of the dead that suggests a peculiar way of existing otherwise than being in this world.